



# 追放薬師は 人見知り!?

川上とむ

Kawakami Tom

illust. jura

## レリック

各地を巡る、  
商売上手な旅商人。  
気さくてフレンドリーなため、  
エリンには警戒  
されがち。

## マイラ

拳闘士の少女。  
エネルギッシュな性格をした、  
「エリン工房」の  
メンバー。

## クロエ

商人見習いの少女。  
「エリン工房」の経営を  
支える縁の下の  
力持ち。

## イアン

ノーハット伯爵家の令息。  
聡明だが、癒えぬ病を  
抱えていて……

## ミラベル

魔法に長けた女剣士。  
「エリン工房」のオーナーで、  
周囲を振り回す  
自由人。

## スフィア

元奴隷の少女。  
奴隷商から救われて以来、  
エリンを先生と慕う、  
可愛い一番弟子。

## エリン

実家の工房を追い出された  
少女。人見知りな一方、  
薬師としては超一流。  
腕前を買われ、「エリン工房」の  
看板薬師を  
務めることに。

## 第一章 薬師、追放される

薬師とはその名のとおり、様々な薬を作って人を助ける職業で、みんなの憧れた。

国一番の薬師を父に持つわたし——エリン・ハーランドは、幼い頃から薬師になるべく勉強に明け暮れ、十歳の誕生日を迎える頃には最高ランクである特級薬師免許を取得。神童ともてはやされた。

……そこまでは、順風満帆な人生だったけど。

わたしが特級薬師免許を取得した翌年、男手一つでわたしを育ててくれた父が流行り病で亡くなった。

そして父の『ハーランド工房』は、叔父のグレガノさんに引き継がれ……もとい、乗っ取られてしまったのだ。

身寄りが無いわたしは叔父に引き取られるも、その後の生活は悲惨そのもの。奴隷同然に働かされた。

調合室に閉じ込められ、ひたすら薬を作り続ける日々。

部屋から出ることさえできず、食事はわずかな水とパンが与えられるだけ。薬の材料である植物をかじって飢えをしのいだこともあった。

そんな生活を六年近く続けた結果、わたしは人と話すことが極端に苦手になってしまった。俗に言う、人見知り。下手をすると、人間不信の域に達している。それくらい、人と話せなくなっていたのだ。

……そんなある日のこと。わたしはグレガノさんから工房長室に呼び出された。あの人がわたしを呼ぶなんて、いつ以来だろう。

もしかして、ようやく待遇を改善してくれるとか？  
せめて、週に一度はお風呂に入らせてくれないかな。

体は濡らした布で拭いているけれど、常に清潔にしておかないと薬の調合にも支障が出るし。

期待に胸を膨らませながら扉をノックし、工房長室へ足を踏み入れる。

そこには部屋の主である赤髪の男性——グレガノさんと、その妻のステラさん、娘のエルトナの姿があった。

「……エリン、てめえは今日でクビだ。今すぐこの工房から出ていけ」

かつて父が使っていた机に足を載せながら、グレガノさんは開口一番そう言った。

言葉の意味が理解できず、頭の中が真っ白になる。

……出ていけて、そんないきなり？　なんで？　どうして？

これまで散々貢献してきたはずのわたしが、どうして工房を追い出されるの？

疑問が頭の中を駆け巡る。でも駆け巡るだけで、うまく言葉にならない。

「あっ、その、どうして……」

しどろもどろになって視線を泳がせる。

すると、部屋の奥から一人の女性が出てきた。知らない人だ。

「紹介するぜ。こいつはマリエッタ。うちの新しい薬師で、今日からお前に代わってエルトナの補佐を担当してもらう」

名前を呼ばれ、女性が一礼する。

腰ほどまである金髪を三つ編みに結った、緑の瞳が綺麗な人だった。いつも目の下にクマを作っているわたしと違って、きちんとお化粧までしている。

つまり、代わりの薬師を雇ったからわたしは用済みだと？　そんな身勝手な。

「マリエッタは特級薬師免許を持つだけじゃなく、性格が明るくて愛想もいい。ろくに接客もできないお前とは大違いだ」

グレガノさんが蔑んだ目でわたしを見てくる。

「え、えっと、その」

いやいや、接客以前に、お店にすら立たせてくれなかったのは誰なのか……！

そもそも、誰のせいで人と会話することもままならないような性格になったと思っっているのか……！

心の中で叫ぶも、実際に言葉にすることはできなかった。

わたしはもごもごと口を動かしながら、周りを見回す。

誰か、助け舟を出してくれそうな人はいないかな。やがてその視線が、ステラさんを捉えた。

……この人はダメだ。彼女はわたしを引き取って以来、ずっと無視し続けている。ただひたすらに、父の遺産を食い潰してきた人だ。

今もああやって、我関せずといった様子で大きな宝石を磨いているのだ。助けてくれるはずがない。

続いて、エルトナに視線を向けた。

この子はわたしと同じ年の十六歳だけど、すごく高飛車な性格で……わたしに調査させた薬を奪い、まるで自分が作ったかのように吹聴して回っていると聞く。

嘘も百回言えば本当になるのか、彼女は今や、「将来有望な『ハーランド工房』の看板薬師」なんて言われているそうだ。

「……何よ？ 言いたいことがあるなら、目を見てはっきり言いなさい」

「ひいつ、すみません……」

エルトナに凄まれて、わたしは反射的に謝った。

「パパが決めたんだから諦めなさい。往生際が悪いわよ」

「で、でも、わたし、これまで薬……たくさん作りました……」

「そんなの関係ないの。わかんない？ あなたはもう用済みなのよ。人見知りのエリンちゃん？」女の子だけど、人を見下す時の表情は叔父とそっくりだ。

わたしはつい顔を伏せた。人見知りなのは事実だから、反論できない。

この人たちにとってわたしは身内ではなく、あくまでエルトナの補佐にすぎなかったのだ。

「……あ、もしかしてお金が欲しいの？ パパ、エリンにこれまでの給料を払ってあげてよ」

「給料だあ？ まあ、エルトナが言うなら少しくらい出してやるか。なんて心の優しい娘だ」グレガノさんはそう言うと、ボサボサの髪をかきながらポケットを漁る。

そして一枚の硬貨を投げてよこす。それは床を転がり、わたしの足に当たって止まった。

拾い上げてみると、それは百ピール銅貨だった。

百ピールというと、この街では一回ぶんの食事代になるかどうかだ。

……六年働き続けた報酬が、これ？ あまりにもふざけている。

「あと、これも餞別にあげるわ。こんな古いの、置いていかれても邪魔だし」

エルトナはあろうことか、わたしが愛用していた薬研を放り投げてきた。

わたしは床に倒れ込みながら、なんとか落ちる前に受け止める。

薬研は薬材をすり潰して粉にするための、薬師にとっては命の次に大事な商売道具だ。

それを投げるなんて。しかもこれ、お父さんの形見なのに。

「給料も受け取ったな。さあ、出ていけ」

「元気でねー」

まったく悪びれる様子がないグレガノさんとエルトナに強い怒りを覚えつつも、今のわたしにはどうすることもできない。

わたしは形見の薬研と銅貨を握りしめると、そのまま『ハーランド工房』を飛び出したのだった。

工房を追い出されたわたしは、城下町をさまよっていた。

ここ、ミランダ王国は小さな国ながら、王都はそれなりに発展している。その中心部の城下町ともなれば、人通りも多い。

ど、どうしよう。人の視線が怖い。

今のわたしは薄汚れた割烹着姿だし、どうしても人目についてしまう。

なるべく目立たぬように、道の端をあてもなく歩いていく。

「こ、これからどうしよう」

自分の体を抱くようにして、震える声で呟いた。

わたしは薬を作ることしか能がないけど……この街に存在する薬師工房は、『ハーランド工房』

だけだ。

そこを追い出されたとなると、薬師として働くためには別の街に行く必要がある。

でも、わたしの所持金は銅貨一枚のみ。これでは旅に出るなんて到底無理だ。

……まずは旅費を稼がなくちゃ。どこかでアルバイトをしないと。

そんな結論に至った時、近くの食堂が目にと留まった。

入口にはデカデカと『アルバイト募集中！』の看板を掲げている。

「……アルバイトの王道といえば、接客業だけだ」

いきなりお店に入るのは怖いので、わたしは通りに面した窓から店の中を覗いてみた。

店内にお客さんの姿はなく、一人の少女がいる。

肩ほどまでの青色の髪を左右に揺らしながら、カフェエプロン姿の少女は掃除をしているようだ。

ほうきを片手に鼻歌でも歌っているのか、幸せオーラ全開といった感じである。

「くはっ、眩しいっ……!!」

わたしはその子を直視できず、反射的に視線をそらした。

「わたしが、あの子と同じようにこのお店でアルバイト……?」

そう口にしてみるも、まったく現実味がない。

わたしは想像力を働かせ、お店の中で笑顔を振りまきながら働く自分を想像してみる。

『いらっしやいませー!』

『いよー、エリンちゃん、今日も可愛いねー』

『もー、おだてても何も出ませんよー!』

『わかってるってー。今日もいつもの頼むぜー』

『はーい、ありがとうございませー!』

……いやいやいや。そんな対応、絶対できない。

現実に戻ってきて、わたしは一人頭を抱えた。

人と目を合わせられないし、すぐに緊張でパニックになるし、声は小さいし……。

やっばり、わたしに接客業なんて無理だ。想像しただけで魂が抜けそうになる。

別の仕事を探そう。幸いにしてここは城下町だし、人とかかわらずに黙々と作業できる仕事があるはず……。

そう考えた時だった。

「あの一」

「ひっ!?」

先程まで店の中にいたはずの青髪の少女が、なぜか目の前に立っている。

わたしは思わず悲鳴を上げ、数歩後ずさった。

「さっきからお店の中を気にしていらしたので……もしかして、お食事ですか?」

「あつ、いえその、えつと……そ、そうです」

わたたと手を動かしながら、わたしは思ってもいなかったことを口にする。

突然話しかけられて、完全に気が動転していた。

「そうだったんですねー。ランチタイムはすぎましたが、まだ食事は可能ですよ! こちらへどうぞ!」

少女は明るく笑い、わたしを店内へ誘った。

——いえいえ、食事じゃないんです! ここで働かせてもらおうと思っただけなんです!

……そう言いたいの、例によつてうまく言葉が出ず。

気がつけば、わたしは窓際の席へ腰かけていた。

「本日のオススメは日替わりランチです! 大盛りの鹿肉シチューに、今ならサラダとパンがつい

てたったの百ピールですよ!」

少女の口から料理名を告げられると、それに反応するようにお腹が鳴った。

「あつ、えつと、じゃ、じゃあそれで……」

手持ちのお金も足りているし、もうこうなると、欲望を抑えられない。

「かしこまりましたー。店長さん、注文入りましたよー!」

わたしより一つか二つ年上っぽい少女はキラキラの笑顔で一礼すると、軽やかな足取りで去っていった。

……おかしい。アルバイト志望のはずだったのに、普通に食事してどうするの!

心の中で叫び、真っ白いクロスが敷かれたテーブルに頭を打ちつける。

……うん。食事を終えたら、ここで働かせてもらえないか聞いてみよう。このままだと一文無しになってしまうし。

頑張れエリン。負けるなエリン。

料理が運ばれてくるまでの間、わたしは自らを励まし続けたのだった。

その後、わたしは料理を堪能し、お店をあとにした。

「……はあ。結局、アルバイトの話は切り出せなかった」

久しぶりのまともな食事は心の底からおいしかったけど、本来の目的はそこじゃない。

このままだと、このお店で食べた料理が最後の晩餐になってしまう。それだけは避けないと。

というわけで、わたしは城下町中を巡り、従業員を募集していそうなお店に片っ端から足を運んだ。

けれど、勇気を出せたのもそこまでだった。

店員さんに取り次いでもらって、店長さんにアルバイトの話を持ち出すなんて芸当は、人見知りのわたしにとってはハードルが高すぎる。

店内を薄汚れた恰好でうろつき、誰かに声をかけられると一目散に逃げ去っていく……そんなわたしの姿は、お店側からすれば不審者以外の何者でもなかっただろう。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そんなこんなで夕方近くまで頑張ってみたものの、特に成果を上げられていない。

「はあ、わたしの意気地なし」

結局、最初に食事をした食堂に戻ってきてしまっている。

どうやらこのお店、今は営業時間外らしく、扉には『準備中』の看板が下がっていた。

けれど、店内は明かりがまだついている。中に人はいるようだ。

窓から覗くと、カウンターの奥で作業する店長さんの姿が見える。

立派なヒゲをたくわえた強面の店長さんは、眉間にシワを寄せながらお皿を磨いていた。

……これが最後のチャンスだ。今一度勇気を出せ、薬師エリン。

そう言い聞かせて、扉に手をかける。自分でもわかるくらい、その手は震えていた。

まずは挨拶して、次に表のアルバイト募集を見て来たことを言って……

「それでは、今日もお疲れ様でしたー！」

中に入ったら言うべき言葉を頭の中で練り返していた時、お店の脇から明るい声が出た。

店舗には裏口があったようで、お昼にわたしに声をかけた、青髪の女の子が出てくる。

彼女はわたしに気づかず店の横を通り過ぎ、大通りを走り去っていった。

……そうだ。先にあの子に相談してみたらどうだろう。

その後ろ姿を見送っていると、頭の中にそんな考えが浮かんだ。

少しだけ話をしなさい、何より優しい。わたし一人で店長さんに話をしに行くより、よっぽ

どいいかもしれない。

そんな結論に至ったわたしは、急いで女の子を追いかけた。

「あれ、こっつて……」

そうして辿り着いたのは、『ハーランド工房』だった。

「あの子、お薬を買いに来たのかな……?」

わたしが首をかしげていると、少しだけ開いた扉の奥から、グレガノさんと女の子の話し声が聞こえてきた。

息を殺しながら扉に近づき、耳をそばだてる。

「ちよ、ちよっと待ってください！ 熱冷ましのお薬、昨日は四百ピールだったじゃないですか！それがどうして、千ピールになってるんです!？」

「そりゃあ、値上げしたからに決まってるだろ。材料費が高騰したんだよ。こっちも商売なん

でな」

女の子の叫ぶような声に、グレガノさんが気怠そうに答えている。

「高騰はわかりませんが、それでも一晩で値段が倍以上になるなんておかしいですよ！」

「文句を言うなら買わなくてもいいんだぜ？　うちの薬は薬師の技術料も込みなんだ。なあ、マリエッタ」

グレガノさんの言葉に反応するように、女性の声が出た。

距離が離れているらしく、彼女がなんと言ったのかは聞き取れない。

「むむむ……！　わかりました！　買います！　買いますよ！」

「そうこなくっちゃな。へへっ、まいどあり」

女の子は苛立ちを隠さずに告げ、薬を購入した。

……それにしても、『ハーランド工房』の値上げ幅はどう考えても異常だ。

グレガノさんのことだし、値段を吊り上げてさらに儲けようとして魂胆だらうけど……この街唯一の薬師工房がそんなことをしているのは、お客さんの反感を買うだけだと思——

「わぎゃ!？」

……モヤモヤした気持ちになっていると、目の前の扉が勢いよく開け放たれた。

その扉に弾き飛ばされ、わたしは地面にひっくり返る。

次の瞬間、女の子が『ハーランド工房』から勢いよく飛び出してきた。

「ぎゃ!？」

彼女は地面に転がるわたしに足を取られてバランスを崩し、盛大に転んだ。

その拍子に、女の子が持っていた袋は空中へ放り出され、中身の粉薬がぶちまけられた。

「あああ、せつかく買った薬が……！」

わたしに覆いかぶさったまま、女の子は悲痛な声を上げる。

「ご、ごごめんなさい。その、わたし——」

「なんだあ？　騒がしいと思ったら、エリンじゃねえか」

女の子の下敷きになったまま謝っていると、扉の奥からグレガノさんが顔を覗かせた。

「お前、まだこの辺をほっつき歩いていたのか？　さっさとどっかに行け」

彼は吐き捨てるように言ったあと、乱暴に扉を閉める。

荒々しい音に、わたしは思わず身を縮こませた。

「うわあ……この薬、まだ使えるでしょうか。砂が混ざってそうですが、選り分けられようにか……！」

そんな中、女の子はわたしの上から這い下りて、地面に散らばった薬を必死にかき集めていた。混乱しているのか、粉薬と砂を選り分けるなどというよくわからないことを口走っている。

「あ、あの、どなたか体調が悪いんですか……？」

わたしも起き上がって、おずおずと尋ねた。

扉の前に陣取っていた以上、こちらにも非があるし、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「は、はい……実はここ数日、親友が高熱に苦しんでいて。アルバイトで貯めたお金で、ようやく

薬を買えたんですが……」

砂と薬が混ざったものをかき集めながら、女の子はそう言葉を返す。

そういえば、熱冷まし薬がどうこう聞こえたつけ。

でも、熱冷ましの薬にしては、この匂い……。

「……ちよっと、失礼」

違和感を覚えたわたしは、袋の中にわずかに残っていた薬を手に取り、少しだけ舐めてみた。

「……主成分はゴールデンリーフにパープルアイ。それにグリーンオーリーブも少量入っているけど、スイートリーフの配合量が明らかに少ない。たぶん、規定量の半分以下。これじゃ、すごく苦いだけで熱冷ましとしての効果は薄い」

「え？」

スイートリーフはその名のどおり甘い葉っぱで、料理にも使う一般的な植物だ。薬として用いるのは根っこの部分。根には甘味成分が濃縮されており、それは葉の数十倍に達する。

その甘さたるや、根っこを煎じて粉末にした場合、すぐさま鼻に届くほどに強烈だ。

それがまったく感じられないなんて、どう考えてもおかしい。スイートリーフの使用量が極端に少ないか、もしくは配合されていない可能性すらある。

わたしならこんなミスはしない。この薬はエルトナか、あのマリエッタさんが作ったのかな。

「……あの、もしかして薬の成分がわかるんですか？」

「へっ？ いえ、これはその……」

集中して材料を分析していたところに声をかけられ、わたしは慌てふためいた。

『ハーランド工房』の工房長さんともお知り合いのようですし……、まさか、あなたは薬師だったりするのでは!？」

「い、一応薬師ですが、今は失業した身でして……」

「お願いします！ ぜひうちに来てください！ あ、私はクロエって言います！」

「は、ははあ。クロエさん。わたしはエリンと申します……って、わわわ!？」

自己紹介もそこそこに、クロエさんはわたしの手を掴むとぐいぐい引っ張って走り出した。ちよ、ちよっとちよっと。わたし、どこに連れていかれるの!？」

わたしがクロエさんに連れてこられたのは、城下町の外れにある二階建ての建物だった。

「あ、あの、ここ、どこですか？ さっきの食堂じゃないですよね……?」

「食堂? ……ああ、お客さんでしたか。あそこはただのアルバイト先ですよ。どうぞ、上がってください!」

クロエさんに促されるがまま、わたしは建物へ足を踏み入れた。

棚には小物や道具が置いてある。部屋の間取りを見た限り、ここはもともと薬師工房のようだった。

そういえば、父が亡くなるまではこうした小さな工房が街の至るところにあった覚えがある。

ただ、グレガノさんが『ハーランド工房』を引き継いでからは、利益独占のために、他の工房に

圧力をかけて潰していったと聞く。

ここは、その被害に遭ったお店の一つなのかな。

「あ、あの、クロエさん、このお店、薬師工房のようですけど……」

「そうなんですよー。ミラベルさんが買い取ってくれたんですが、まだ開店準備はおるか、国に開業の申請すらしてなくてー。ミラベルさん、今も部屋で寝てるんでしょうか」

そう言いながら、クロエさんは腰に手を当ててお店の中を見渡す。

そこかしこに埃が積もっているものの、棚上の道具だけは新品のようだった。

「あの、この街で薬師工房を立ち上げるのは、やめておいたほうがいいかも……」

「え？」

「い、いえ。なんでもありません。ごめんなさい」

思わず忠告したものの、声が小さすぎてクロエさんには届かなかっただらう。

聞き返してきた彼女にとっさに謝り、わたしはうつむいてしまった。

「マイラは寝込んでしまうし、雇うはずだった薬師さんには逃げられてしまうし。もう踏んだり蹴ったりなんですよー」

そんなわたしを気にすることなく、クロエさんは困った顔のままカウンターを通り抜けた。

そして、その奥の階段の下で足を止める。

「あ。熱を出しているのがそのマイラって子で、今は部屋で寝ているんです。こっちですよ」  
振り向いてそう言うてから、クロエさんは階段を上り始めた。

……どうやら彼女、こちらが聞かなくてもいろいろと答えてくれる、お喋り好きなタイプのようだ。  
人見知りのわたしからすれば、付き合いやすい相手かもしれない。

「昔患った熱病の後遺症で、マイラはときどき熱を出すんですよ。普段は元気いっぱいなんですけど」

そんな説明を聞きながら二階へ上がったわたしは、一番手前の部屋へ案内された。

部屋の中にはベッドが置かれていて、赤髪の少女が横たわっていた。

どこかあどけなさが残る顔立ちだ。わたしより年下だろうか。

「マイラ、寝てるみたいですね。エリンさん、診てもらっていいですか？」

「あつ、はい……」

神妙な顔つき時のクロエさんに言われ、わたしはおずおずとベッドのそばに腰を下ろした。

マイラさんの頬は赤く染まっており、呼吸も荒い。静かに首元に触れてみると、脈が速く、明らかな熱を感じた。

「この症状は、やはり熱冷ましの薬が必要、ですね……」

診断を下し、頭の中で必要な薬材を整理していく。

解熱鎮痛剤として一番効果があるのは、ゴールドエンリーフだけど、これは日の当たる森や草原に自生する植物。

今から採りに行く余裕はないし、薬材を取り扱うお店は城下町でも限られている。この時間だと、

もうお店を閉めている頃かもしれない。

次点でパープルアイ。こちらはごく一般的な花だから、花屋に行けばあると思う。さらにスイートトリーフも必要だ。これも野菜として売っているし、八百屋ならどこでも買えるはずだ。

街の中で手に入る薬材では、簡易的な薬しか作れない。ただ、何もしないよりはマシだろう。

「そういえばこのお店、地下に倉庫があるんですよ。前の人が残っていたのか、カラカラに乾いた木の根つことか謎の瓶詰めが並んでいて、不気味な場所なんですけど」

「……そこ、案内してください！」

クロエさんの言葉に、思っていたより大きな声で返してしまった。わたしは反射的に自分の口を押さえる。

そこはおそらく、このお店の薬材倉庫だ。

もしかしたら、使える薬材が残っているかもしれない。

「いいですよ！ こっちですよ！」

クロエさんはマイラさんの部屋を出て、どたどたと階段を下りていく。

彼女についていくと、カウンター奥にある調査室らしき部屋に通された。

階段下のデッドスペースを利用した調査室には窓がなく、日光がまったく入らない。

「こっちはです。一度だけ中を見てみたんですが、気味が悪くてすぐに閉めてしまいました」

クロエさんは近くのランプに火を灯すと床の扉を開ける。

渡されたランプを手に、わたしは中を覗き込んだ。

扉を開けてすぐのところは木製のはしごがあり、その先に人一人がやっと立てそうな広さの床が見える。

周囲は、無数の柵や木箱で埋め尽くされていた。

わたしは慎重にそこへ下りて、あたりを見渡す。

目線より少し高いところに、乾燥させた木の根が何本も吊るされていた。

近くの柵には瓶詰めの実のところ狭しと並んでいる。

「おお……あれはジャールの根。こっちにはグリーンオリーブが……！」

数年間は放置されたと思しき場所だけど、予想以上に薬材が残っているようだ。

想像以上の収穫に、わたしは興奮してしまった。

「やっぱ、薬師さんにはわかるんですね……この緑色の実、お薬の材料なんですか？」

「ひいっ」

近くにあったグリーンオリーブの瓶詰めを手を取っていると、すぐ隣で声が出た。

そちらを見ればクロエさんがはしごに腰かけ、興味深そうな視線を向けている。

「そ、そうです。高い木の上に見える実で、採取が大変で……」

わたしは視線を泳がせながら説明し、そっと距離を取ろうとした。

けれど地下倉庫が狭いせいで、それは叶わなかった。

……ち、近い。それにクロエさん、なんかいい匂いがする。  
「じゃあ、ここにある材料だけでお薬が作れちゃったりします?」

動揺するわたしに気づくことなく、クロエさんは胸の前で両手を合わせ、期待に満ちた目でこちらを見つめてきた。

「そ、それは無理です。足りない材料があるので、お店で買ってこないと」

「じゃあ、行ってきますよ! 何が必要ですか?」

クロエさんはキラキラの笑顔を見せ、メモ用紙を取り出した。

「えっと……、まず、花屋さんでパープルのアイを買ってきてください。その、できれば植木鉢に植えられたものがいいです。それと、八百屋さんでスイートリーフもお願いします」

「スイートリーフって、料理に使う甘い葉っぱですよ?」

「は、はい。そっちは根っこがついたものをお願いします」

「根っこつきでいいんですか? 新鮮さをアピールするために根っこをつけたまま売っていることもありませんが、料理だと捨てちゃう部分ですよ?」

「や、薬材にはその根っこを使うので。よろしくお願いします」

「わかりました! それじゃ、ちゃちゃっと行ってきますね!」

わたしが説明し終わると、クロエさんはメモをポケットにしまい、地下倉庫を飛び出していった。  
……本当に元気な人だ。

倉庫から出たわたしはクロエさんの帰りを待ちながら、お店の道具を借りて調査準備を進めるこ

とにした。

「ようやく一人になれたし、今のうち、今のうち……」

調査室に備えつけられた水道設備が生きていたので、まずは桶に水を溜める。

続いて薬を煎じるための土瓶にも水を入れて、火にかけて。

お湯が沸くのを待つ間、倉庫から持ってきたジャールの根とグリーンオリブを、自前の薬研で粉にしておく。

……誰にも邪魔されない、調査の時間が一番好きだ。

グレガノさんに理不尽に怒られても、エルトナの失敗の尻拭いをさせられても、ステラさんに無視されても……

薬を作り始めれば、周囲の声なんて聞こえない。

嫌なことを全部忘れて、自分だけの世界に入ることができる。調合作業、最高。

薬材たちよ、わたしが数年ぶりに命を吹き込んであげましょう――

「……うん? クロエ、帰っていたのか?」

「ひよえっ!」

作業に没頭しかけたタイミングで背後から声がかかり、わたしは悲鳴を上げた。

「い、いいいえ! その、クロエさんはですね……!」

「……うん? 誰だ、お前は」

うるたえながら振り返ると、鋭い目つきの女性が立っていた。見た目は二十代前半といったとこ

ろだ。

着古したチュニックとズボンを身につけていて、一見すると男性のようだ。

腰ほどまである金髪が、ところどころ跳ねている。

お店の入口が開いた気配はしなかった。この人はどこから現れたのだろうか？

「うちの工房に無断で入り込むとは……、怪しいヤツめ」

そんなことを考えていた矢先、女性はわたしを睨みつけ、腰の剣を抜き放った。

まるで鏡のように磨き抜かれた剣身に、わたしの姿が映っている。

三つ編みにしている深緑色の髪は手入れが行き届かず、あちこちがほどけかけた。

青色の瞳の下にはクマができていて、顔色も悪い。身につけている割烹着もボロボロだった。

これは、不審者だと思われても仕方がない。

……もはや、現時点で取れる行動は一つだけだ。

わたしはその場に膝をつき、全力で土下座した。

そして、できるだけ大きな声で叫んだ。

「ど、どうか、命だけは！ 命だけはお助けください。これには深い事情がありまして……！」

『ハーランド工房』では土下座させられることなんて日常茶飯事だったし、これくらい慣れている。

「……頭を下げなくていい。言っておくが、ここには盗るようなものはないぞ？」

どうやら、わたしは泥棒と勘違いされているらしい。

「え？ あの、わたしは泥棒ではなくてです」

「違うのか？ それならば、何をしにやってきた？」

「えっと、そのですね。あの……」

必死に声を出そうとするも、頭の中をいろいろな単語が駆け巡るだけで、うまく言葉を紡げない。

ど、どうしよう。このままだと業を煮やされて、あの剣でバツサリと……

「ただいま戻りましたー！ エリンさん、頼まれた材料、買ってきましたよー！」

最悪な考えが頭をよぎった時、底抜けに明るい声が出た。

調合室の外から、クロエさんがひよこっと顔を出した。

「えーっと、これはどういう状況です……？」

部屋の中に広がる光景を見て、クロエさんは固まっている。

剣を抜いた女性と、その前で土下座し、冷や汗を流すわたし。

彼女が混乱するのも無理はない。

「……クロエ、それはこっこの台詞だ。こいつはお前の知り合いなのか？ 説明してくれ」

女性がため息をついて剣を鞘に納める。それを確認して、わたしもおおずとおおずと上体を起こした。

「こちらの方は、私がお連れしたんですよ、ミラベルさん。エリンさん、このたびはうちのオーナーが大変失礼をいたしました」

クロエさんはそう言いながら、手を取って立ち上がらせてくれた。

「失礼も何も……私に話を通していないクロエにも非があると思うが」

「私も気が動転してたんですよ。それにミラベルさん、寝たてでしょう。あ、エリンさん、こち

らはミラベルさん。この建物のオーナーです」

「は、はあ、オーナーさん……えっと、エリン・ハーランドと申します」  
紹介されたオーナーさんと視線を合わせられないまま、わたしは自己紹介をした。

「ミラベル・ラステルクだ。この店のオーナーで、見てのとおり剣士をしている。驚かせて悪かったな」

ミラベルさんが握手を求めてくる。その手は握り返せたものの、やはり目は合わせられない。

「……声が小さいのはいいとして、せめて握手をする相手の目は見ろ」

「す、すみません。わたし、人見知りなもので……目を合わせるのが、苦手で」

「人見知り……？」

正直に答えると、ミラベルさんは呟くように言って首をかしげた。

「まあ、いいだろう。それでクロエ、こいつはどうしてここにいる？」

「ふっふっふー。それがですねえ。実はこのエリンさん、凄腕の薬師さんなんですよ！ 粉薬を舐

めただけで成分を言い当てちゃったんです！」

ミラベルさんが問うと、クロエさんは嬉しそうにわたしを見た。

「ほう。つまり、我が工房の新しい薬師候補として連れてきたわけか」

「そうです！ 今は、マイラのために熱冷ましの薬を作ってくれてるんですよ！」

……はい？

薬は作ってるけど、新しい薬師候補とはなんですか？ 初耳なんですけど。

「なるほどな……では、お手並み拝見といこう」

「はい！ エリンさん、頼まれていたパープルアイと、スイートリーフです！」

理解が追いつかないでいるうちに、クロエさんが右手に持っていた袋をわたしの胸に押しつけてきた。

「あ、ありがとうございます……えっと、それでは調合作業に入ります……」

いろいろと思うところはあった。けれど、わたしはその場の空気に流されるがまま、薬研へ向き直る。

できることなら一人で作業したいけど……それは無理そうだ。

クロエさんたちには部屋を出ていく気配がなく、背中に視線をひしひしと感じる。自分の手が震えているのがわかった。

わたしは覚悟を決めると、薬研に残っていたジャールの根とグリーンオリブを手早く粉にし、それを別の薬皿に移した。

それから植木鉢のパープルアイを袋から取り出す。

このパープルアイ、まるで大きな瞳に見える紫色の花を咲かせることが名前の由来で、野生のものは木に巻きついて成長していく。添え木をすればくるくと可愛らしく蔓を伸ばすので、鑑賞用の花として人気が高い。

でも、薬材に使うのは根っこの部分。花も茎もいらないので、すべてちぎってしまう。

「ああ……綺麗な花だったのに」



……クロエさん、それは言わないで。わたしだって罪悪感がないわけじゃないから。

背後から届く声を聞き流して、あらかじめ溜めておいた水を使って根っこを丁寧に洗い、水気を拭き取ってから薬研にかける。

本来ならきちんと乾燥させるべきだけど、緊急時だから致し方ない。

「これがお薬になるんですか？　なんだか甘い匂いがしますけど」

「ひえっ」

粉砕作業をしていると、クロエさんがすぐ横にやってきた。興味津々に覗き込んでくる。

「こ、これは甘いのが特徴なんです。後味は少し苦いですが、他の薬材に比べて飲みやすいので、

重宝されています」

緊張しながらそう伝えると、クロエさんはうんうんと頷いた。

一方のミラベルさんは腕組みをしたまま、背後からじっとわたしを見ている。

……視線が痛い。すごく怖い。

そんな視線から逃げるように、わたしはスイートリーフに手を伸ばした。こっちも使うのは根っこの部分なので、茎や葉はさっさと取ってしまう。

「……エリン、その薬研はどうしたんだ？」

「はいっ!？」

ミラベルさんに突然話しかけられ、妙な声が出た。

「こ、これは父の形見、です」

「お父上も薬師だったか。どこかの工房に勤めていたのか？」

「あの、『ハーランド工房』……です。わたし、創業者の娘で。今は追い出されましたが」

「ああ……そういえば家名が同じだったな。追い出されたとは、それはまだどうして」

「えっと、その、実はですね——」

調合作業を続けながら、わたしはただどしくも身の上話をする。

ミラベルさんは何を言うでもなく、静かに話を聞いていた。

「——というわけで、わたしは工房を追い出されてしまったんです」

「なるほどな。お前、なかなかに壮絶な人生を歩んでいるな」

「そ、それは、なんとなく自覚しています。あ、熱冷ましの薬、できました」

身の上話をしている間も手は勝手に動き、気がついたら薬の調合が終わっていた。

「見せてくれ」

ミラベルさんが薬研の底に溜まった粉薬をわずかに手に取る。

「ふむ。粉も均一で見事なものだ。あの短時間でこれほどの薬を作るとは、クロエの言っていたことに偽りは無いようだな」

「あつ、ありがとうございます……」

つい頭を下げた。褒められたのなんて、いつ以来だろう。

「しかし、これだけの腕前を持つ薬師を追い出すなんて、『ハーランド工房』の連中はアホなのか？」

……わたしに言われましても。たぶん、アホだとは思いますが。

「お薬もできましたし、マイラ、叩き起こしてきますね！」

クロエさんは言うが早いか、階段を駆け上っていった。

いやいや、叩き起こすって比喻だよ？ 病人に対してそんな乱暴な……！

そう考えた直後、ミラベルさんと二人きりになっていることに気づいた。緊張感が増す。

「量が少ない気もするが、これで一回ぶんなのか？」

「い、いえ。三回ぶんです。この薬は粉のままだと飲みにくいので、湯薬にします。とろみがあるので、体も温まるので」

わたしはそう説明しながら、いい塩梅に沸騰した土瓶のお湯に調合した薬を投入した。

「このまま煮出して、お湯が半分になったら煎じあがりです。スイートリーフのおかげで甘みも出るの、飲みやすいですよ」

「そこまで水気を減らしてしまっているのか？ 味が濃くなりそうだが」

「むしろ、十分に加熱することが重要なんです。生煮えだと副作用が強くなってしまつて。スイート

リーフだと、手足のしびれや筋肉痛です」

「……お前、薬の話になると饒舌になるな」

「へっ？ いや、そんなことは……」

苦笑しながら言われ、わたしは言葉に詰まった。

沈黙が訪れて、グツグツとお湯の沸く音だけが調合室に響く。

……ち、沈黙がづらい。ここは何か話さなければ。

「あの、ミラベルさんも、薬師……なんですか？」

「うん？」

わたしはしばし考えて、遠慮がちに尋ねてみた。

「あっ、違ったらすみません。薬について、知っているようでしたので」

「ああ……昔、少しかじったことがある程度だ。だが薬師免許も持っていないし、大したことはできない」

すると、そんな言葉が返ってきた。

なんだか言いにくそうにしているし、あまり触れられたくない話題なのかもしれない。

長年グレガノさんたちの顔色を窺って生きてきたわたしは、この手の微妙な表情の変化を敏感に読み取ってしまう。

相手が言いたくないと察した以上、もう聞くことはできない。

……結局、その後は会話が途切れてしまった。

わたしはなんとも言えない緊張感の中、無言で土瓶をかき混ぜ続けたのだった。

やがて起きてきたマイラさんが調査室にやってきた。お薬を飲んでもらう。

「……甘いつて聞いていたのに、ぜんぜん甘くない。うええ」

「りよ、良薬は口に苦しと言いますし、頑張つて飲んでください……！」

「でもなんか、効きそうな気がする。薬師さん、ありがとね」

マイラさんは赤い顔でわたしにお礼を言うと、ふらつきながら部屋へ戻っていった。

急いで作った薬だけど、きちんと飲んで一晩寝れば、熱は下がってくるはずだ。

「そ、それでは、わたしはこれで……」

マイラさんを見送ったあと、わたしは急いで道具を片付けた。

お役御免だろうし、これ以上居座つても迷惑がかかる。早急にお暇しよう。

調査室を出ると、クロエさんとミラベルさんもついてきた。

「ちょっと待て」

店の外へ向かう扉に手をかけた時、ミラベルさんに呼び止められた。

わたしはおっかなびっくり振り返る。

「薬師エリン、お前の腕前を見込んで頼みがある」

「な、なんでしょう……？ わたしの腕前なんて、その辺にいるスライムと同じくらいで……」

「よくわからないとえで自分を卑下するな。私たちはお前の腕を高く買っている。うちの専属薬師にならないか？」

「……はい？」

思いもよらない提案に、わたしは耳を疑った。

「実は、近いうちにここで薬師工房を開こうと思っただけでな。雇用予定の薬師に逃げられて途方に暮れていたんだ。エリンが入ってくれるのなら、こちらとしても助かる」

ミラベルさんは腰に手を当てて、店内を見渡す。わたしは反論を試みた。「でも、新しい工房を開くと、『ハーランド工房』に目をつけられて潰されてしまいます。潰された工房、たくさん知っているので」

「あいつら、潰しに来るのか？ はっはっは。上等じゃないか。なあ、クロエ」

「そうですねー。あんなぼったくり工房、逆に私たちで潰しちゃいましょうよ」

答えたクロエさんは笑顔だけど、声が笑っていない。

法外な値段で薬を買わされたうえに、あんな接客をされたら頭に来るのもわかるけど……真つ向勝負を挑むつもりなのか。

「なあに、心配するな。エリンの調合技術があれば、誰が相手でも負けはしないさ」

反応に困っていると、ミラベルさんはまるでわたしの心を読んだかのように言った。

「寝ているマイラは事後承諾でいいだろう。あいつにとって、エリンは薬を作ってくれた恩人なわけだし、感謝こそすれ、拒むことはないはずだ」

「そうですねー！」

「そ、そうですね……？」

ニコニコ笑顔のクロエさんに思わずツッコむも、彼女の耳には届かなかつたらしい。

ミラベルさんがさらに言う。

「工房を追い出されたなら、今晚の宿も困っているんじゃないか？ ここなら部屋が余っているぞ？」

「え、それはまあ……困ってはいますけど」

わたしの返事を聞いて、クロエさんが両手を合わせた。

「なら決まりですね！ 掃除も終わってますし、すぐに使えますよ！」

「ああ。今日から入居して構わない。うちの薬師として働いてくれるのなら、家賃も不要だ」

「え、えっと。そのー、あのー」

なんだかトントン拍子に話が進んでいく。わたしは意を決して手を挙げた。

「あ、あの！ お気持ちはすごくありがたいんですが、一つだけ教えてください」

「いいだろう。なんでも聞いてくれ」

「どうして、行きずりのわたしを雇ってまで、この街で薬師工房を開きたいんですか。その……潰されるかもしれないのに」

「そうだな……この街の現状が我慢ならなかった、というのが理由かな」

わたしの問いかけに、ミラベルさんは淀みなく答えてくれた。

「薬というものは、みんなに平等に与えられるべきものだろう？ 一部の人間が独占してはいけないと思ったのさ」

予想外にまっすぐな答えが返ってきて、わたしは目を見開いた。

多少は薬の知識があると聞いていたけど、ミラベルさんは剣士のはずだ。

それなのに、この人は『ハーランド工房』が支配する街の現状を変えようとしている。

「……さあ、私の崇高な目的を知ったからには、是が非でも協力してもらおうぞ」

ミラベルさんはニヤリと笑う。その笑顔に気圧けおされてしまい、わたしは頷うなくことしかできなかった。

「よしよし。これからよろしく頼むぞ、薬師エリン」

「こ、こちらこそ、よろしくお願ねがいいたします……」

深々と頭を下げたら、緊張で変な口調になってしまった。

話が急すぎて頭の整理が追いつかない。

とりあえず住む場所には困らなくて済みそうで、わたしは安堵あんどしたのだった。



翌日。わたしの作った薬が効いたようで、マイラさんの熱は無事に下がった。

「ミラさんから聞いたけど、うちの新しい薬師さんなんでしょ？ 昨日はお薬ありがとう！」

朝食の席で一緒になると、マイラさんは底抜けに明るい笑顔でお礼を言い、握手を求めてきた。

それに応じると表情をいっそう明るくし、ますます距離を詰めてくる。

ち、近い。笑顔が眩くらしい……！

「あたし、ここで用心棒まうしんぼうの仕事してるんだけど、ときどき熱が出ちゃうんだよねー。いやー、ご迷惑をおかけしました」

一瞬だけしおらしい顔をし、すぐに頭をかいてからからと笑うマイラさん。表情豊かな人だ。

「まったく。今回は珍めづしく高熱が長引いたからな、さすがに焦あせったぞ」

そんなマイラさんを見ながら、ミラベルさんが大きなため息をつく。

「もう大丈夫だから！ 今夜はあたしの快気祝かいきいわいとエリンさんの歓迎会かんげいかいをしようよ！」

わたしの手を離すと、マイラさんは立ち上がって声を弾はじませる。

「……え、歓迎会ってことは主役？ 人見知りだから目立つのは嫌だ。できたらやめてほしいんだけど。」

「快気祝かいきいわって……、マイラ、自分で言っちゃうんですか？ ミラベルさん、どうします？」

「いいだろう。どのみちエリンの歓迎会はしようと思っただけだからな。クロエ、買い物頼めるか？」

「いいですよー」

わたしが困惑しているうちに、どんどん話が進んでいく。これはもう止められそうにない。

「もつとも、午前中は大掃除の予定が入っていますので、買い出しはお昼からになります！」

クロエさんが部屋の隅すみに置いた掃除道具に視線を送った。

重ねたバケツの中に、雑巾ぞうきんやモップ、ほうきといった道具が詰め込まれている。

「掃除か……頑張れよ。私は工房の開業申請をしに、これから王宮に行ってくる」

「『頑張れよ』じゃないですよ。戻ってからです。いいので、ミラベルさんも手伝ってくださいね」

クロエさんがジト目でミラベルさんを見る。

出会ってからずっとニコニコしているクロエさんだけど、あんな表情もするんだ。

「まあ、気が向いたらな……さて、動くとするか」

お茶を濁したミラベルさんが席を立つと、それを合図にみんなが動き出す。わたしもそれに合わせるように立ち上がり、掃除の手伝いに取りかかった。

「それでは、マイラは床の掃き掃除をお願いします。それが終わったら、雑巾で水拭きをしておいってください。私たちも自分の担当が終わり次第、手伝いに来ますので」

「りょかい！ 寝込んだぶん、キリキリ働くよ！」

マイラさんはクロエさんからほうきを受け取ると、勢よく窓を開けた。

その様子は元気がありあまっているという感じで、とても病み上がりとは思えない。

……さて、わたしも頑張らないと。

今日掃除をするのは、主に一階の店舗スペースだという。

生活の場である二階とキッチン、そして食堂はすでに掃除を終えたいらしい。建物の広さのわりに掃除が必要な場所は少なくて済みそうだ。

「それじゃ、まずはここから終わらせちゃいましょう！」

やる気満々のクロエさんとともに向かった先は、お風呂場だった。

「おお……お風呂……！」

このお店にはお風呂があったのか。知らなかった。

うんうん。前に借りていた人も薬師工房を開いていたようだし、お風呂はあるよね。調査をするうえで、衛生面は大事だし。

実はわたし、お風呂が大好き。めったに入れなかったってこともあるけど、家の中で数少ない一人になれる場所だし、落ち着くから。

「あ、エリンさん、お風呂場の掃除は簡単でいいですよ。このお風呂、使えないらしいので」

これからは毎日お風呂に入れるなんて夢のよう……なんて考えていると、クロエさんから耳を疑う言葉が発せられた。

「え、そうなんですか？」

「残念ながら。お湯を送るパイプが壊れているとかで、水しか出ないんですよ」

そんなあ。わたしの毎日お風呂計画が……。

少なからずショックを受けながら、わたしはタイルの床に水を撒き、掃除を始めたのだった。

掃除はお昼すぎに終わった。

三人で徹底的に磨き上げたおかげで、お店の床も柵もピカピカだ。

これならいつ開業しても恥ずかしくない。

「おお、見違えるように綺麗になったな」

達成感に浸っていると、まるで掃除が終わるタイミングを見計らったかのようにミラベルさんが戻ってきた。

「あれー？ ミラベルさん……帰ってくる時間、さすがに露骨すぎませんか？」

「そう言うな。ほら、クロエの好きなラズベリージャムのサンドイッチを買ってきたぞ。みんなで

お昼にしよう」

ミラベルさんがお土産を差し出して来る。

「仕方ないですねえ。今回は大目に見ましよう。お茶を淹れますね」

お土産を見たとなん、不機嫌オーラを発していたクロエさんの表情が一変した。上機嫌に鼻歌なんて歌いながら、キッチンへ去っていく。

「よしよし。無事に切り抜けたな」

クロエさんの背中を見送りながら、ミラベルさんはほくそ笑んでいた。

……この人、そこまで掃除したくないのかな。

その後、食堂でサンドイッチとローズヒップティーをいただいていると、ミラベルさんがおもむろに話し始めた。

「工房の開業申請についてだが、問題なく受理されたぞ。数日中には許可証が発行されるだろう」  
誇らしげに言い、みんなの顔を見渡す。

マイラさんとクロエさんは「これで一步前進だ」と喜び、ハイタッチを交わしていた。

「そこで、だ。少し早いがお前たちに仕事の割り振りをおきたい」

ミラベルさんが今一度わたしたちを見る。そして口を開いた。

「まずは調合担当、エリン！」

「あっ、はいっ」

一番に名を呼ばれて、反射的に立ち上がる。

「開業後は私たちが仕事を取ってくる。薬の配達や接客はしなくていい。エリンは調合作業に集中してくれ。この工房の要だ。頼んだぞ」

「わ、わかりました」

気合を入れて頷くと、おのずと背筋が伸びた。

これまでどおりの調合をやっていけば大丈夫。頑張れエリン。負けるなエリン。

「次に用心棒、マイラ！」

「はい！」

胸に手を当てて深呼吸をしていると、続けてマイラさんが呼ばれた。

「この街は治安もいいし、定住する以上は用心棒としての仕事は減るだろう。普段は接客や薬の配達業務、エリンの薬材調達を手伝ってやってくれ」

「わかりました！」

マイラさんはびしっと敬礼する。

用心棒をしている……というマイラさんの自己紹介がずっと気になっていたけど、この三人は旅人だったのかな。もしそうなら、道中の魔物対策は必要だと思っし。

「あの、マイラさん……用心棒ということは、ミラベルさんみたいに剣士をなさっているんですか？」

「ううん。あたしは拳闘士！己の拳一つで敵と渡り合うんだよ！」

思わず尋ねると、彼女は拳を突き出した。よく見れば、拳に銀色の金具をはめている。

彼女の武器はどうやら拳銃……いわゆるナックルダスターのようだった。

「エリン、街の外へ薬材採取に行く時は、必ず私かマイラに言って同行させる。決して一人で行くんじゃないぞ。外は魔物が出て危険だからな」

「は、はい」

魔物という単語に、気が引き締まる。

マイラさんに採取をお願いしてもいいけど、薬材によっては他の植物と見分けがつきにくいものもある。わたしが現地に行つて採取するほうが確実だ。

とはいえ、わたしは戦えないから魔物と遭遇したらひとたまりもない。採取中の護衛は必須だろう。

「店で買える薬材についても、マイラに頼んで構わない。マイラもそれでいいよな？」

「いいよー。どんどん使つて！」

ミラベルさんに問われ、マイラさんが赤髪を左右に揺らしながら元気いっばいに言う。

つまり、お使いを頼んじやつていいと。

人見知りなわたしにとつて、それはありがたいかも。

「最後にクロエ！ お前には接客と書類整理、薬の在庫管理を担当してもらおう！」

「はい！ ……つて、ちよつと待つてください！ 私、仕事多くないですか!？」

一旦は返事をしたものの、指を折りながら業務を数え、クロエさんは黄色い瞳を見開いた。

「お前は将来、商人になりたいのだから？ それならば、こんな小さな工房くらい切り盛りできて

当然だ」

「むむ……理に適つてはいますが、掃除や洗濯はミラベルさんがやってくれるんですね？」

「……仕事の割り振りは以上だ」

「ちよつと待つてください！ ミラベルさんは!? ミラベルさんの担当を聞いてないですよ!？」

「私は工房長の仕事で忙しい。特に開業前後はやる事が多くてな」

「それでも書類整理くらいは手伝ってくださいよー！」

クロエさんが両手を突き上げて憤慨するも、ミラベルさんはどこ吹く風だった。

そのまま話を打ち切つて、ミラベルさんがわたしの近くへやつてくる。

「エリン、調合室で話がある。ちよつと来てくれるか？」

「あつ、はい。行きます」

わたしはカップに残っていたお茶を飲み干して、立ち上がった。

それからミラベルさんのあとについて食堂を出て、調合室へ足を運ぶ。

「ここが今日からお前の仕事場となるわけだが……、薬材や道具の配置など、自分の好みがあるだろう。午後はその整理をするといい」

決して広くない室内を見渡しながら、ミラベルさんが言う。

こちらで一応掃除はしたものの、道具の類は棚の中に乱雑に放置されたままだ。

頃合いを見て、整理する必要があると思つてはいた。

「それと、もし調合作業に集中したければこれを使い」

そう言ってミラベルさんが差し出したのは、古びたカーテンだった。

「な、なんですかこれ」

「これを使えば、目隠しになるだろう」

窓のないこの部屋にカーテンなど不要では……なんて考えていると、彼女は頭上を指差す。そこには、カーテンレールがあった。

……ほう。入口にカーテンを取りつけければ、廊下との仕切りができてプライベートな空間を確保できるということですか。

「階段下とはいええ、ここはキッチンやカウンターと近いし、雑音が気になる時もあるだろう。なんならカーテンの設置を手伝ってやるぞ？」

「あっ、椅子を踏み台にすればなんとかなると思うので、一人でやります。ありがとうございます。まず」

ミラベルさんなりにわたしを気遣ってくれたのだと理解し、お礼を伝える。

その反応に満足したのか、ミラベルさんは頷くと食堂へ戻っていった。

一人残されたわたしは、さっそく道具の配置を考えていく。

「薬研はここでもいいし、土瓶はこっち。薬皿は重ねて収納しておいて……」

薬を作るための道具はひととおりミラベルさんが揃えてくれていたようで、新たに購入すべきものはない。

新品の薬研もあったけど、わたしには父の形見がある。新しいほうは予備にしておこう。

道具の配置を決めたあとは、小さな椅子を借りてきてカーテンを取りつける。

わたしは背が低いけど、なんとか無事に設置できた。

試しにカーテンを閉めてみると、しっかりと目隠しになる。

その一方で、薄めの生地のおかげで外の光はある程度入ってくる。

暗くなればランプを使えばいいし、わたし的には非常に落ち着ける空間だった。

立派な目隠しを前に、腰に手を当てて満足感に浸る。

「これでよし。あとは……」

わたしは床の扉に目をやった。

調合室の地下には薬材倉庫があるから、この整理もしないと。

扉を開けてはしごを下り、わたしは倉庫内の薬材をチェックしてみた。

薬材は長期保存が利くものが多いが、ここにあるものはさすがに放置されすぎだった。

瓶詰めにした一部の薬材や乾燥しているもの以外、ほとんどが使えない。

「これもダメ。これも使えない。うぐっ、こっちはカビが……」

倉庫内を歩き回り、目についた薬材を片っ端から仕分けしていく。

奥には木箱も見えるけれど、あれは一人では運び出せない。今度、誰かに手伝ってもらおう。

ある程度片付けたところで、薬材倉庫の整理は一旦終了。地上へ戻る。

床の扉を閉めて一息つくくと、とたんに静寂が訪れた。

「ミラベルさんの言うとおり、カーテンをつけて正解だったかも」

仕切ったおかげで、外の音はあまり聞こえない。いい感じの暗さもあって、なんか落ち着く。ほのかに薬材の香りがするし、周囲には大好きな調合道具たちがある。ここはまさにわたしの城だ。

「ふふっ……ふふふ……」

じわじわと嬉しさが込み上げてきて、つい小躍りしてしまう。

労働環境を整えるって、大事だよね！

「エリン、すまない。クロエが聞きたいことがあるそうなんだ、が……」

その時、カーテンが勢いよく開いて、眩しい光とともにミラベルさんの顔が覗いた。

その背後にはクロエさんの姿もあり、ミラベルさんと同じ驚きの表情で固まっている。

……見られた。踊ってるの見られた。

わたしは無言で床の扉を開け、地下の薬材倉庫へその身を滑り込ませる。

「待て待て！ 何も言わずに倉庫に閉じこもろうとするな！」

「そうですよ！ 素敵なダンスだったじゃないですか！」

扉を閉めようとした時、頭上からそんな声が聞こえた。

次の瞬間には、無理やり地上へ引つ張り戻される。

「うう……やっぱりバッチリ見られてたんだ……」

「ど、どうしたんですか？ 私たち、何も見てないですよ」

「そ、そうだぞ。何も見ていないぞ」

スライムのように床に力なく横たわっていると、二人が優しい声をかけてくれる。

その気持ちをありがたいと思いつつ、あとで入口に『一声かけてから開けてください』という看板を設置しておこう……と決意する。

しばらくして、わたしは精神的ダメージからようやく回復した。

「……先程は大変お見苦しい姿をお見せしました。それで、質問とはなんでしょ？」

できるだけ取り繕ったあと、改めてクロエさんたちに向き直った。

「開業にあたって薬の一覧表を用意しようと思っっているんですが、エリンさんはどんな薬を作れま

す？」

「えっと、薬材があれば、基本的にどんなものでも。よく使われるものなら熱冷まし、腰痛の薬、

頭痛薬、耳鳴りの薬に下痢止め——」

指折り数えながら伝えると、クロエさんはそれをメモにしたためていく。

「その相場って、わかります？」

「ハ、ハーランド工房の値段でしたら。今頃、価格が変わっているかもしれませんが……」

「それで十分ですよ。あの人たちのことですし、熱冷まし以外の薬も絶対に値上げしています」

それは間違いない……と考えながら、記憶にある販売価格を教えていく。

効能が同じなら、お客さんは安いほうが手を出しやすいだろう。なるべく価格を抑えて提供し

たい。

「ありがとうございます！ 次に薬材なんですが、新たにどんなものが必要ですか？」

「あつ、はい。倉庫にある瓶詰め薬材はまだ使えるので、他に必要なのはゴールデンリーフに音止め草、ネバイモ——」

「待つてください。ネバイモって、あのすり下ろすとドロドロになるイモですか？ スープに入るとおいしいですよね？」

「そ、そうです。あれも薬材になるんです。あとは……」

驚いた表情を見せるクロエさんに説明しつつ、わたしは必要薬材を列挙していった。

……その日の夜、マイラさんの希望どおり、快気祝いとわたしの歓迎会が催された。

食堂のテーブルに並ぶのはクロエさんお手製の料理で、見るからにおいしそうだ。

思わず唾を呑んでいると、ミラベルさんが声を上げた。

「それでは食事の前に、エリンに簡単な挨拶をしてもらおう」

料理にありつく前に、最大の敵が立ちはだかった。

「あ、挨拶……」

「どうしたエリン、顔が真っ青だぞ」

「いえ……生まれてこのかた、こうした場の挨拶なんてしたことがないもので……」

湯気を上げている料理に視線を落としながら、わたしは呟いた。

「そう難しく考えるな。簡単な自己紹介で構わないぞ」

向かいに座るミラベルさんは手を広げながら苦笑する。

その隣のマイラさんも、わたしの隣にいるクロエさんも、同じように笑みを浮かべていた。

そう言われなくても。苦手なものは苦手なのだ。

「仕方ないな……クロエ、手本を見せてみる」

「はい!？」

突然ミラベルさんに指名されたクロエさんが、素っ頓狂な声を上げた。

「新入りが一人で挨拶をするから緊張するんだ。クロエも一緒ならエリンも気が楽になるし、参考になるだろう？」

「挨拶ですかー。うーん……」

ミラベルさんが説明すると、クロエさんは考える仕草をしながら立ち上がった。

そしてキラッキラの笑顔を見せる。

「クロエ・リーベルグ、十六歳です！ 商人見習いをしています！ 趣味は編み物と、詩を作ることです！」

そのあまりの眩しさに、わたしは右手で顔を覆った。

……というか、クロエさんってわたしと同年だったんだ。

てつきり、年上だと思っていた。

「さすがは商人志望。外面を取り繕うのがうまいな」

「むー、取り繕ってなんていないですよ。エリンさんに誤解されたらどうするんですか」

ミラベルさんのコメントを受けて、クロエさんは一転眉をしかめて着席する。